

スタグナントスラブを「診る」ための海底地震・電磁気長期観測の開始

Research on the stagnant slab by long-term BBOBS and OBEM arrays

塩原 肇 [1]; 後藤 忠徳 [2]; 杉岡 裕子 [3]; 馬場 聖至 [4]; 川勝 均 [5]; 志藤 あずさ [4]; 一北 岳夫 [6]; Adam Claudia[2]; 市來 雅啓 [7]; 小山 崇夫 [8]; 金沢 敏彦 [9]; 歌田 久司 [4]

Hajime Shiobara[1]; Tada-nori Goto[2]; Hiroko Sugioka[3]; Kiyoshi Baba[4]; Hitoshi Kawakatsu[5]; Azusa Shito[4]; Takeo Ichikita[6]; Claudia Adam[2]; Masahiro Ichiki[7]; Takao Koyama[8]; Toshihiko Kanazawa[9]; Hisashi Utada[4]

[1] 東大・地震研・海半球センター; [2] JAMSTEC; [3] 海洋研究開発機構; [4] 東大・地震研; [5] 東大・地震研; [6] (有) テラテクニカ; [7] 海洋機構; [8] なし; [9] 地震研

[1] OHRC, ERI, Univ. Tokyo; [2] JAMSTEC; [3] JAMSTEC; [4] ERI, Univ. of Tokyo; [5] ERI, Univ of Tokyo; [6] TIERRA TECNICA Ltd.; [7] JAMSTEC; [8] ERI, Univ. of Tokyo; [9] ERI, Tokyo Univ

2004年から5年間の期間で開始した特定領域研究「スタグナントスラブ: マントルダイナミクスの新展開」(領域代表者: 深尾良夫)で大きな鍵を握る、フィリピン海・北西太平洋での広帯域海底地震計と海底電位磁力計によるのべ3年間に渡る長期観測を2005年10月に開始した。スタグナントスラブとは、海溝で沈み込んでいった海洋プレートがマントル内の深さ670km遷移層付近で滞留している現象で、実際のマントル対流というものを理解する上ではその原因・実態を解明することが重要な鍵となる。この目的での海底長期観測を開始するため、海洋研究開発機構の研究船「かいいい」KR05-14航海により18観測点において広帯域海底地震計12台および海底電位磁力計11台を設置した。本発表ではその研究目的・観測計画・本航海の経過などを紹介する。